

## 巻頭言にかえて

川 島 隆 義

雨過天青“うかてんせい”中国の青磁の「青」を指している。雨の後の青空のように澄んでいるという意味があるそうだ。台風一過というより長雨の後の穏やかな晴天という感じがする。今の日本経済は何時晴れるともしれない長雨に例えることが出来ようか。

「職安で孫とパツタリ顔あわせ」(朝日川柳)。失業率が5%を越えた。学生の就職が難しい、地方へ権限移譲と交付金削減、町工場の育成は、農林漁業の振興をどうするか、商店街の復活は、少子高齢化対策は、年金はどうなる、日本経済は底なし沼にはまりこんでいる。世界は自爆テロと戦争、こんなひどい新世紀があつていいものだろうか。

新聞を開くと上のような文言が目にはいる。

新潟応用地質研究会は昭和37年(1962)に設立された。新潟県地質調査業協会もこの年の設立である。お互いに強く関係している。この研究会はご承知のとおり企業・研究機関そして官が原動力となっている。私は常々、企業の盛衰が会の活動を左右する、と考えていた。その考えからすれば発足以来41年、この会が始まって以来の難しい時代を迎えている。リストラの嵐。企業が助かっても人が捨てられる。企業は人なりという。ここで言う人とは「人物」で「人数」でないことは確かだが、雇用した責任はある。何とか新しい道を見つけて雇用を確保出来ないものか。

私は今、当研究会のメンバーと旧街道を歩いている。旧街道とは別に経済活動から見捨てられ、車も通らない用済みの旧国道も見られる。道は荒れ果てているがそれぞれに風光明媚で、山菜やキノコ、鮎やヤマメ、スッポンに至るまで自然の食材が豊富である。稲架けした米もある。清水も湧いている。温泉もある。興味深い歴史もある。大自然の静寂がある。

旧街道や旧国道を活用して地方活性化が出来ないかと考えている。テーマパークなどではなく自然環境を満喫出来る散策道として蘇がえらせる。若い人が茶店を作り地物を販売する。宿泊施設を建てる。街道の両端に駐車場を設けて車を預かり帰り側の駐車場へ車の移動をしてやる。崖崩れや雪崩対策、下水に公共投資をする。並木を整備して春には桜、夏は涼、秋は紅葉、冬は温泉と自然食料理。そうすれば、老若男女が集まる。社会の一線を退いた夫婦が多いかもしれない。うまく行けば、地方の町や村に若者の生活の場が生まれるかもしれない。

少し話しを拡大させてもらうが、自動車などの大企業は日本の牽引者だという。しかしロボット化された職場で人はいらぬ。大企業でなくて良い、スローの会社で良い、賃金が少なくとも安定して働ける職場が沢山欲しい。

地下水に砒素が混入する事件があった。大戦中、旧日本軍が埋めた化学兵器が原因らしい。戦争の残した傷は至る所に有って今も癒えない。戦争はしないと誓った。やられても武力ではやり返さないという覚悟で決めた9条である。守ることも攻めることも戦争である。有事法制という戦争のための改革、銀行には1兆9600億円もの資金投入、軍備や大企業にまわす税金をやめれば地方の整備などは容易に出来る。このままでは、中小企業は政府と銀行に潰される。

女性からは少子は社会に責任があるという。「産む・産まない」は個人の自由であるという。子供に拘束される。社会参加が出来ない、女性として自由闊達に生きたい。至極もっともである。しかし、終戦の年に小学校へ入学した小生には何か不自然に思える。子供が未来を造ることに疑いはない。だが少子化は未来という芽を摘むことになる。極端な少子は巡りめぐって本人に贅寄せが行かないだろうか。

「ジジちゃん」「ババちゃん」と孫が元気に叫びながら玄関から飛んでくる。嵐がやってきたようなものだが、素直に安堵感がこみ上げる。

一時の小さな雨過天青である。